

<教育長だより 14号 杵差岳朝日に映えて 令和6年11月6日>



たすき
襷をつないで

教育長 津野庄一郎

昨年コロナ禍を経て3年ぶりに復活を果たした「第49回村民駅伝大会」が、11日3日秋晴れのもと、各コミュニティー選抜の17チーム（オープン参加1含む）、監督選手含め200名余りが参加して行われました。午前9時、旧女川保育園前をスタート（スターター：加藤弘村長）して、激走を制して優勝したのは、過去優勝31回の川北Aチーム、準優勝は下関Aチーム。上関Aチームは3位と連覇はかないませんでした。小学生から60代までが8区間しっかりと襷を繋ぎ、沿道の声援を背に25.5キロを走り切りました。優勝チームの田村弥一監督は、中学校の同級生で通算40回出場のつわもの。祝福の胴上げに接し、嬉しく誇らしい気持ちになりました。

本番に備え、夜7時過ぎにヘッドライトをつけてひた走る選手たち。一方、関川村スポーツ協会（会長：小池稔）並びにスポーツ推進委員の皆さん、教育委員会（主担当：木島恵理）をはじめとする関係者の方々は、何度も打ち合わせを行うなど運営面で大会を支えました。当日、事故や怪我がなく無事に終えられたのも、関係各位のご尽力のお陰であると深く感謝申し上げます。

人口減少率が際立つとされる関川村ですが、日本発祥の長距離リレーである駅伝というスポーツ文化は、今も絶えることなく受け継がれ、それが各集落・コミュニティーで暮らす人々の絆を深めてきました。個人の方だけによらず、チーム全体で勝利を目指すこと。これはこれからの学校教育にとっても、小規模自治体にとっても極めて大切なことであると思います。来年は50回の節目の大会。どんなレースが展開されるのでしょうか。

同日、村民会館アリーナで、「村民文化祭」が開催されていきました。（主担当：須貝佳苗）園児の絵画や高齢者の手芸に至るまで多彩な作品が展示され、11月2日～4日の3日間の来場者数は551人。村民のポテンシャル（潜在能力・可能性・将来性）と芸術文化に対する関心の高さを感じます。ご協力ありがとうございました。

【写真】 村民会館前ゴール地点で選手を待つ人達（左）・「せきともクラブ」の児童が制作した案山子（右）